

近世における信濃国の「山畑」と「原畑」に関する歴史地理学的研究

伊 藤 寿 和

一 はじめに

本稿において検討を加える近世における信濃国の「山畑」と「原畑」に関して、管見の範囲においては、諏訪湖の東域に位置する山地・高原を支配領域としていた高島藩の「下山畑」に関する米家泰作氏の研究¹⁾が唯一の専論であると思われる。

米家氏は、その論文において、近世後期（文化12年・1815）の「村々高・免・家軒・人別・里数付帳」²⁾を検討して、高島藩に属する139村の内、「下山畑」の地目が記載されている村々の分布が一望できる図を提示され、この地域においては「下山畑」が広く営まれており、「下山畑」の記載がない村落が僅か17か村に過ぎないことを明らかにされた。

すなわち、諏訪湖の東域に位置する広域な山地と台地を領内に有する高島藩においては、「下山畑」は決して珍しい地目ではなく、広域な山地と台地の草原（草野）や灌木林（芝間）で営まれていた「焼畑的なハタケ」である可能性を示された。

他方、本稿の後半で検討を加える「原畑」に関して、管見の範囲においては、まとまった先行研究はなされていないように見受けられる。

かつて、筆者が関連する史料群から新たに見出した古代・中世において営まれていた「焼畑」を意味する「山畑」³⁾の地目名と、原野を一時的に粗放的な畑として利用する「野畠」⁴⁾の地目名は、近世以後も引き続いて正式な地目として採用され、各地の藩において検地が実施されている。土地利用的には「野畠」に近いものと想定される信濃国の「原畑」に関しては、長谷川正次氏⁵⁾と北原正人氏⁶⁾が言及されている。

本稿においては、米家氏と長谷川氏・北原氏の先行研究に学びながら、関連する史料を紹介・検討し、米家氏が検討された諏訪湖の東域に位置する高島藩の他に、広大な面積を有する信濃国の各地域・各藩の差異に留意しながら、「山畑」と「原畑」の実態の一端を明らかにしたい。

二 「山畑」の存在とその実態

米家氏は文化12年（1815）の高島藩領内に位置する139か村に関する詳細な史料を検討し、図1を作成された後、次のようなまとめを提示されている。すなわち、この地域においては、中世末まで、「山畑」と表記された焼畑が盛んに営まれ、慶長6年（1601）年に高島藩主となった諏訪氏もその土地利用と地目の価値を認めて継承し、17世紀半ばに実施された総検地においても検

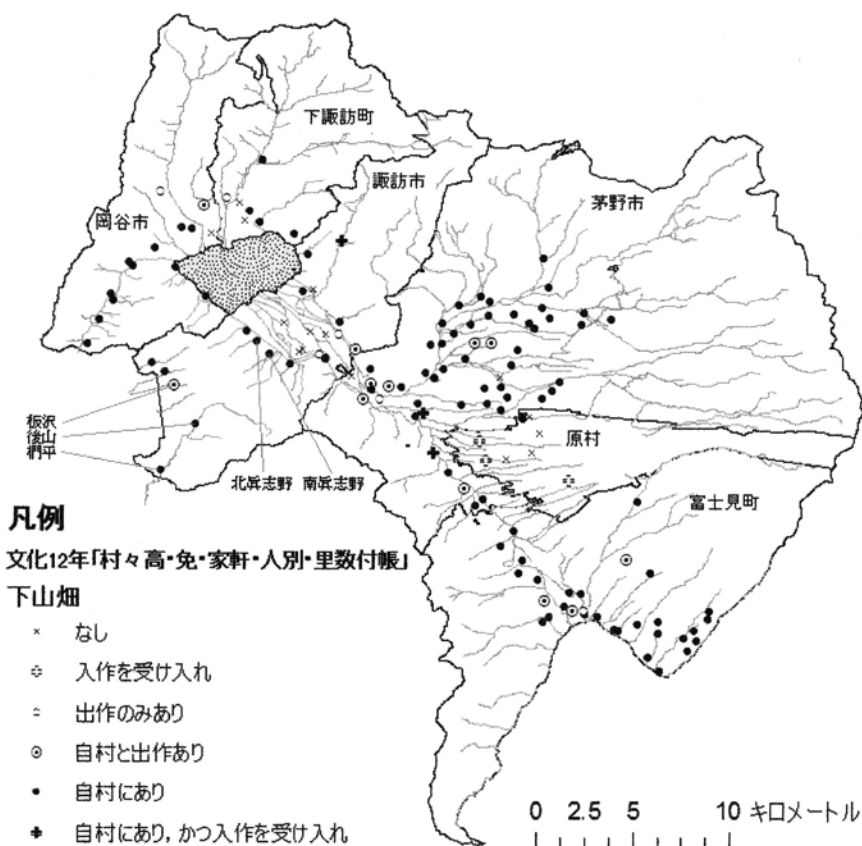


図1 「下山畑」をもつ高島藩の村落 (1815) (注1より引用)

地すべき標準的な地目と規定された。石盛においては、上畑10斗・中畑8斗・下畑7斗に対して、下山畑の石盛は6斗として検地がなされた。

けれども、高島藩内においては、「下山畑」が明確な焼畑であることを明記する関連史料は稀であり、近世中期の宝暦8年(1758)の史料⁷⁾が、実際に「焼蒔」をおこなった数少ない関連史料であることを指摘されている。さらに、この「焼蒔」をおこなった「下山畑」は、一般的な山間の森林を伐採しての「焼畑」ではなく、この地域の山地と台地に広範に存在していた草原(草野)と灌木林(芝間)を伐り拓いて営まれた「草原の焼畑」であった可能性が高いことを指摘された。

広大な山地斜面と台地を有する高島藩領のこの地域においては、中世後半まで盛んに営まれていた森林を伐採して営まれる「山畑(焼畑)」は全盛期を過ぎ、遅くとも、近世中期には、広大な山地斜面と台地に広がっていた草原(草野)や灌木林(芝間)の中に「草原の焼畑」的な要素を含む一時的な「畑地」が開かれて、近代以後には、本来の「草原の焼畑」的な耕作形態を有する土地利用は姿を消したものと想定されている。

米家氏が想定された大きな流れに関して、筆者も異論を有するものではない。ただし、米家氏が検討された近世後期の当該の史料に関しては、別の観点からの検討も必要であるように判断される。

表1 「下山畑」の石盛の差異

1 斗 1 例	2 斗 2 升 34 例
1 斗 1 升 1 例	2 斗 3 升 23 例
1 斗 2 升 3 例	2 斗 4 升 9 例
1 斗 3 升 9 例	2 斗 5 升 14 例
1 斗 5 升 11 例	2 斗 6 升 1 例
1 斗 6 升 2 例	2 斗 7 升 1 例
1 斗 7 升 3 例	2 斗 8 升 1 例
1 斗 8 升 12 例	3 斗 2 升 2 例
1 斗 9 升 4 例	3 斗 5 升 2 例
2 斗 33 例	3 斗 6 升 1 例

別の観点から検討を要する第1の点は、米家氏が検討された近世後期の文化12年（1815）の同じ史料に基づいて作成し、表1として示したように、同じ「下山畑」との記載がなされている地目であっても、その石盛に村ごとに大きな差異が存在していることである。17世紀半ばに実施された高島藩の総検地においても「下山畑」は検地すべき地目と認定され、石盛においても「下山畑」の石盛は6斗として検地がなされた。これに対して、この史料に記載がなされている「下山畑」の石盛は、最も低いものでは反別1斗の事例が1例よりはじめて、最も高いものでも反別3斗6升の事例が1例である。反別2斗前後の事例が多く、17世紀半ばに実施された総検地の石盛・6斗の約3分の1に過ぎず、すこぶる低い石盛となされているのである。「下山畑」と言う同じ地目として認定・記載がなされた畑・165筆に関して、

このように多様かつ低い反別1斗から反別3斗6升まで、20分類もの石盛が付されたのか、その過程と実態を明らかにしたいものである。

第2の点は、「下山畑」との記載がなされている165筆（うち、2筆は中山畑）のうち、「新切」との注記がなされている事例が10例存在していることである。この史料が作成された近世後期の文化12年（1815）に、全165筆のうち、「下山畑」が新たに12筆切り拓かれたことが判明する意味からも、重要な注記であると判断されよう。「新切」との注記がなされた「下山畑」の石盛は、1升が1筆、1斗2升が2筆、1斗3升が2筆、1斗5升が4筆、2斗が2筆、2斗3升が1筆であり、全165筆の「下山畑」のうち、7%余に当たる「下山畑」が新たに切り拓かれていたことが判明する。この実態は、近世中期以後、この地域においては「下山畑」が衰退して行くとの米家氏の想定とは異なるものであると考えることも、或いは可能であると判断されよう。

特に、「新切」の注記の他に、「戌起」などの注記もなされている。この「戌起」の注記は、前年に切り拓かれたことを意味していると判断される。この史料をこのように読み理解した場合、この地域において、近世中期以後、「下山畑」と記載される「焼畑的なハタケ」の性格を色濃く有する土地利用の形態が衰退して草原（草野）や灌木林（芝間）となり、採草地の景観に特化していったとの想定も、一端は留保せざるを得ないように思われる。

その場合、米家氏の想定を全面否定しているのではなく、別の側面からこの史料を読み直し、同じ信濃国内における他の地域の関連史料も広く探して比較・検討した場合、米家氏の想定をある程度裏付ける、近世中期に衰退する直線的な動きではなく、「焼畑」的土地利用を継続したい動きと、それに反対する動きのせめぎ合いが続いていた複雑な経過の一端が判明するように思われる。

その点で注目されるのは、文化12年（1815）のこの史料において、上田・中田・下田、上畑・中畑・下畑、そして、「下山畑」の他に、「林畑」と「萱畑」の地目が数多く記載されていること

である。「林畑」と「萱畑」の石盛の多くは「下山畑」とほぼ同じに見積もられている。この点は、草原はもとより、林や萱原を切り拓いて「焼畑」的な土地利用をおこなう「下山畑」の地目と、互換の関係にあると想定することも可能であると判断されよう。

なお、時代的には少し遡るが、寛政7年（1795）に作成された同じく高島藩領の「子之神神田畑方地詰帳」⁸⁾には、上畑・中畑・中下畑・下畑に次いで、189筆の「下山畑」と、180筆の「林畑」が記載されている。また、次に引く近世後期の史料⁹⁾は、「草野（草間）」と「下山畑」が同義語として使用されている点からも、重要な史料であると判断されよう。

史料1 木戸口新田源助草野売渡証文（文化8年・1811）

売渡し申草野手形之事

庚午の御年貢金ニ指詰申ニ付、名所鶴沢坂風除々内幸衛門割下山畑壹畝七歩半高七升五合物成壹升五合六夕、名所同下山畑廿壹歩高四升式合物成八合七夕四才、右式筆為代金与文式分値ニ請取、当年未之春々拾年賦ニ売渡申処実正也、（中略）、右草間ニ付、（下略）

この史料によれば、すでに、米家氏が指摘されているように、一般的な山間の森林を伐採・焼却して営む一般的な「焼畑」形式の畑ではなく、高島藩領に広範に存在していた山地や台地の斜面の草原（草野）や灌木林（芝間）を切り払って行う、「草原の焼畑」形式の土地利用であった可能性が高いことを再確認しておく必要がある。これまでの「焼畑」研究においては、山間の森林を伐採・乾燥・焼却しておこなう「焼畑」のイメージが強すぎ、山地の斜面や台地の草原（草野）や灌木林（芝間）を切り払い・焼いて行う、「草原の焼畑」の研究をさらに進める必要があると痛感せざるを得ない。

他方、広範に存在していた「下山畑」に、新たな植林をおこなって「林」に戻す動きも存在していた点には、十分な留意が必要である。

史料2 後山新田百姓建林畝歩書上帳（寛政7年・1795）

山ノ神

下山畑拾式歩 甚右衛門

不残木建

この史料¹⁰⁾によれば、近世中期も終わりに近い寛政年間において、水源林としての「林」を育てるため、新たに28筆の土地に植林がなされたことが判明する。28筆の内、中畑が2筆・下田が1筆、残りの25筆はすべて「下山畑」である。

このように、高島藩領内に広範に存在する山地の斜面と台地において、その一部において「草原の焼畑」的な土地利用がなされていた可能性が高い一方、米家氏が指摘されたように、田畑に施す緑肥や馬の餌となす草原の必要性は高まり、全体として、近世を通じて草原（草野）や灌木林（芝間）の景観をなす方向へと動いていたのは事実であるが、史料2として示したように、水田を営む農民たちにとっては、草原よりも、水源としての保水力のより高い森林の育成を望み、奉行所に新たに「下山畑」への「建林」の嘆願が出されているのである。

直線的に草原（草野）や灌木林（芝間）の景観へと変わっていったのではなく、両者のせめぎ合いと葛藤を経ながら、徐々に近代以後の「草原」が卓越する植生・景観が育成されていったものと理解されよう。史料2と同内容の関連史料は、信濃国の各地域において少なからず確認できる。

なお、念のために付記しておけば、尾張藩領の本曾地域においては、基本的には「切畑」の地目名が使用されているが、一部においては「山畑」と記載された史料が散見され、また、「薙畑（なぎ畑）」の地目名も用いられている。さらに、信濃国全域にわたる関連史料の収集と検討が必要であろう。

三 「原畑」の存在とその実態

近世における信濃国の「原畑」に関しては、管見の範囲においては、僅かに、長谷川正次氏と北原正人氏の両氏が関連史料を紹介・検討されているのみである。まず、長谷川氏は、高島藩と隣接する高遠藩において実施された慶長検地・寛永検地・明暦検地・元禄検地に関して、検地条目を示した上で、具体的な村の実例も上げて、各検地の特徴と検地の実態を検討されている。

その研究成果によれば、長谷川氏の調査の時点において、慶長の検地帳が残されていたのは僅か二か村のみであり、次いで実施された寛永検地に基づく「年貢免状」も僅か二か村に残されているのみであった。寛永17年（1612）の入野谷郷黒河内村の場合、記載された田畠の地目と石盛は、中畑（4斗）・下畑（3斗）・下々畑（1斗）に対して、「原畑」3升・「山畑」2升との記載がなされている。これに基づけば、すでに、近世初期より高遠藩領においては検地の地目として上畑・中畑・下畑・下々畑の下に、草原（草野）や灌木林（芝間）を切り開いて一時的に畑として利用する土地利用の地目として「原畑」と「山畑」（写真1・2）が成立し、下々畑の1斗に対して、圧倒的に低い石盛が付けられていたことが判明する。

寛文13年（1673）に藩役所に提出された藤沢郷の嘆願書¹¹⁾の第一条には、「一 本田畑之儀、高免ニ被仰付、誠ニ原畑・鹿畑御年貢去ル廿五年以前より新年貢被召上迷惑仕候、肥後守御代之御帳成ニ御年貢召上可被下候事」との記載がなされており、村方においても、すでに「原畑」の地目が定着していたことが判明する。

ただし、ここで留意すべきは、「原畑」の次に記載がなされている「鹿畑」である。一般的に、東北地方の焼畑を意味する「鹿野畑」を想起させる表記であるが、この地域では余り使用されない地目名であり、慎重な取り扱いと検討が必要である。この「鹿畑」との関連で留意すべきは、元禄3年（1670）に実施された「高遠領検地条目」¹²⁾であり、検地すべき畑の地目として「麻畑」や「茶畑」などの他に、「焼畑」の地目名が入っていることである。領主であった鳥居氏の不始末により、新たに実施されたこの元禄検地に際して、幕府が示した27か条にわたる詳細な検地条目には、「焼畑」の地目と共に、農地となりうる山林・原野での検地が指示されている。検地の結果として、他の地域では使用されている「焼畑」の地目名は使用されていないが、農地となりうる山林・原野が広く検地の対象とされ、「山畑」と「原畑」が広範に検地帳に記載されることになったと理解されよう。

長谷川氏が各郷村ごとにまとめられた一覧表（表2）によれば、元禄検地によって検地帳に記

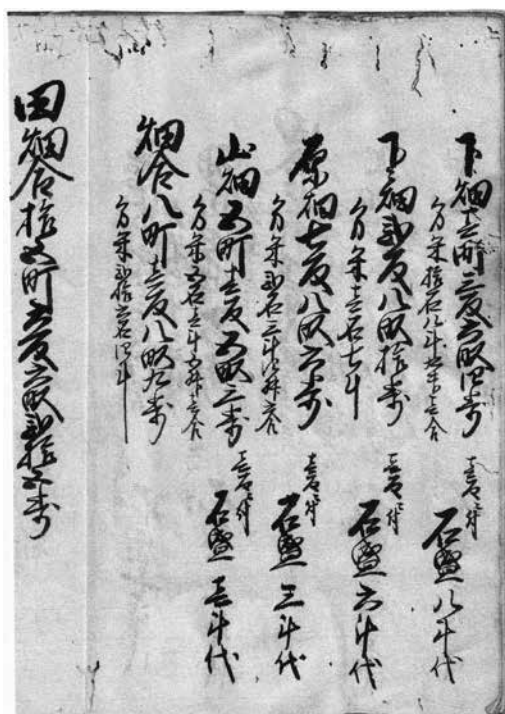


写真2 伊奈郡平出村検地帳

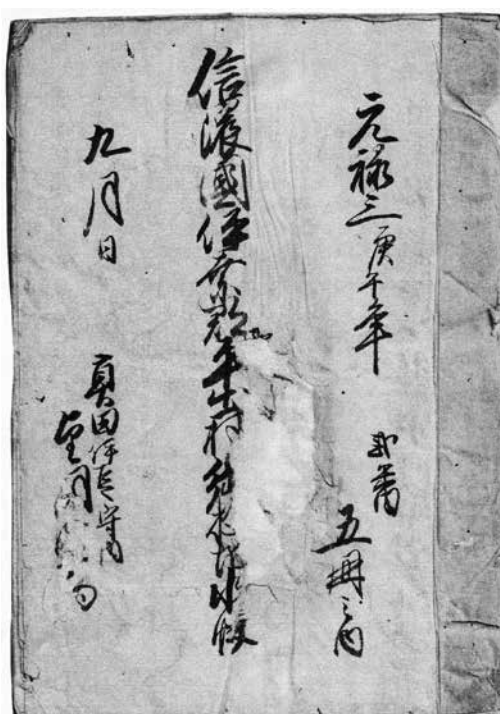


写真1 伊奈郡平出村検地帳 (筆者所蔵)

(各「検地寄帳」にて作成する)

品等	村名	入 野 谷 郷					藤 沢 郷					川 下 郷			上伊那郷	
		市野瀬村	浦 村	溝口村	中非持村	勝間村	山室村	板町村	の場村	弥勒村	荒町村	水上村	台 村	御園村	狐嶋村	北大出村
上々田						138.20		7.20		20.14	9.23	20.09	41.17		8.11	1.06
上 田		3畝21歩		2.03		182.17	26.02	11.21	26.09	74.27	75.24	160.28	89.12	160.08	24.12	17.09
中 田		40.06		191.04		193.26	137.26	245.14	44.06	79.13	149.22	266.19	74.00	211.27	23.04	100.29
下 田		348.03		173.14	56.19	114.01	411.01	330.07	13.16	135.20	92.16	118.13	124.09	229.10	347.17	335.04
下々田		297.12	15.19	111.26	228.12	235.29	1286.22	161.28	38.14	179.14	69.06	6.15	39.02	955.02	855.24	352.05
悪地		136.25		43.01	1.25	22.20	148.16	34.04	47.05	104.16	87.25	2.15	14.18	5.09	372.27	14.24
砂田		78.08	0.12	24.17	2.10	19.24	138.14	24.00	12.25		10.08	2.04	41.28	117.17	749.06	117.10
山田								2.28		110.08			1.03			
河原田		4.10		543.23											70.08	
計		908.25	16.01	1089.28	238.06	907.17	2148.21	818.02	182.15	704.22	495.04	577.13	425.29	1679.13	2431.19	938.27
上々畑						223.23		45.06		2.10			1.18	69.08		14.21
上 畑		51.04		163.10		640.20	31.09	221.28	62.22	39.13	118.23	7.05	18.06	93.29		125.22
中 畑		402.29	319.02	768.23		632.00	325.27	580.06	155.17	770.08	206.04	94.22	85.24	289.28		734.29
下 畑		1416.23	545.25	1099.22		387.07	237.21	371.29	257.14	242.00	111.02	71.18	138.18	404.24		1291.15
下々畑		2003.07	517.27	1015.00	23.13	301.04	1017.29	902.17	277.23	359.06	37.14	21.09	81.11	508.15	105.03	3345.06
原 畑		1045.23	236.07	814.15	395.05	381.20	233.16	942.08	80.01	354.12	63.25	156.14	119.06	1181.26		1478.12
砂 畑		378.03	80.24	30.25	9.25	108.07	1042.27	185.02	41.24	146.23	3.02	4.23	2.27	30.02	201.14	48.23
山 畑		5925.17	2515.05	735.04	388.28	641.13	2496.00		18.04	796.23	545.28	286.20	216.02			
河原畑			1.22													
屋 敷		202.17	82.12	179.04		211.26	152.19	272.21	52.12	70.07	104.21	71.16	27.07	81.04	84.21	270.14
計		11427.25	4297.12	4806.23	816.11	3528.00	5537.28	3521.27	945.27	2781.12	1196.29	714.07	690.29	2659.16	391.08	7309.22
合計		12336.20	4313.13	5836.21	1099.17	4435.17	7686.19	4339.29	1128.12	3486.04	1686.03	1291.20	1116.28	4338.29	2822.27	8248.19

表2 村落別田畑反歩表 (注5より引用)

載がなされた「原畑」と「山畑」は、入野谷郷の市野瀬村では、帳付けされた「原畑」の面積は畑全体の約9%、「山畑」の面積は約52%を占め、畑地の過半を占めている。同郷内の浦村においても「原畑」約5%・「山畑」約59%にも及び、他の郷村においても、ほぼ、同様の傾向を示している。山間地域に位置している信濃国における「原畑」と「山畑」の重要性を示すものである。

北原氏は、享保5年（1720）の高遠藩領の田畑村の「田畑村差出帳」を引用する形で、「原畑」に関して「伊那路ハ山寄ニ而赤土黒ぼい交じり、石原地も有り、**原畑は黒ぼいにて一毛作、**」との記載内容を紹介されている。この史料に基づけば、高遠藩においても、享保年間以前の検地において「原畑」の地目が存在し、認定されていたことが判明する。そして、その「原畑」は、わずか1年のみ畑として切り拓かれ、翌年は本来の草原（草野）や灌木林（芝間）に戻される土地利用の形態であったことが判明する。

なお、「原畑」に関して特に留意を要するのは、先に述べた草原（草野）や灌木林（芝間）を切り拓いて広範に存在していた山地や台地で営まれていた「焼畑的なハタケ」が、数年間耕作されて後、草原（草野）や灌木林（芝間）に戻った土地を、「山畑」ではなく、「原畑」の地目名で記載されている史料が残されていることには十分な注意が必要であると判断される。

史料3 谷中村内証切畑百姓宥免願（享保12年・1727）

- 一 四年以前**切畑**古畑_ニも切返し仕候ハ、向後**原畑**御役所_江御願申達候_ニ御見分請、御指図次第切返仕候様_ニ被仰出、（下略）

この史料¹³⁾は、馬籠村や奈良井村などをはじめとする尾張藩領内の28か村が連名で奉行所に提出した公的な史料であり、その冒頭において、4年以前に「**切畑**」として利用してきた「焼畑としてのハタケ」であっても、焼畑的な土地利用ではない畑として再度切り拓いた場合は、「**原畑**」として奉行所の見分を請けることを28か村の連盟にて願い出たものである。

この史料に基づけば、尾張藩領内の木曾地域においては、山地と台地に広がる森林・草原（草野）や灌木林（芝間）において焼畑として伐り拓かれた「**切畑**」と、「**古畑**」「**原畑**」が互換性の極めて高い土地利用であり、地目名であったことが判明する。

このように、信濃国においては、広大な山地・台地に森林・草原（草野）や灌木林（芝間）を有する故に、「焼畑的なハタケ」であると正式に奉行所も認めた場合においては「**切畑**」の地目名として検地・見分を請けて年貢を払い、「焼畑的なハタケ」としての土地利用を終えた後、草原（草野）や灌木林（芝間）の中に「焼畑的なハタケ」ではない土地利用として営まれた場合は、「**古畑**」もしくは「**原畑**」の地目にて検地・見分の上、「切畑」とは異なる年貢の納入がなされていた事例も存在していたことが判明する。

かように、近世の信濃国においては、「**山畑（切畑）**」と「**原畑**」の一部は、伐り拓かれて「焼畑的なハタケ」として利用され、数年後には耕作が放棄され、その後、再度「焼畑的なハタケ」として利用されており、その植生も、森林・草原（草野）や灌木林（芝間）と畑を循環させてきた、極めて互換性の高い地目名であったことは重要であると判断されよう。

四 まとめ

本稿は、近世における信濃国の山地斜面と台地に広域に営まれていた「山畑」と「原畑」に関して、歴史地理学の立場から再検討を行ったものである。米家氏と長谷川氏・北島氏の先行研究に学びながら進めた再検討のささやかな成果は、以下のようにまとめることが可能であろう。

第1に、主に諏訪湖の東域に位置していた高島藩領において正式な地目となされていた「下山畑」は、すでに米家氏が想定されているように、従来の焼畑がイメージする山間の森林を伐り拓いて営まれている典型的な「森林の焼畑」ではなく、高島藩領の山地の斜面と台地において営まれていた主に草原（草野）や灌木林（芝間）を切り拓いて営まれる「草原の焼畑」をその一部に含んだ「焼畑的なハタケ」であった可能性が高いと想定される。

そして、その草原（草野）や灌木林（芝間）を切り拓いて営まれていた「焼畑的なハタケ」は、近世中期以後、農家で飼育する馬の飼料や田畑に施す緑肥のために減少していくと想定されているが、他方で、村方より水田の用水を確保する目的から、水源の涵養林として新たに植樹する「建林」の願いが村々から出されており、近世後期から直線的に「焼畑的なハタケ」を含む「下山畑」が減少して行く訳ではなく、両者のせめぎ合いと葛藤を経ながら、徐々に近代以後に見受けられる草原（草野）と灌木林（芝間）が主体の植生が形成されてきたものと想定されよう。

第2に、「原畑」に関しては、高島藩領をはじめとして、近世初期の慶長検地や寛永検地の時点から、すでに、正式な検地の地目として採用され、藩領内の各村において検地帳や年貢目録などに記載がなされている。

「原畑」の実態に関しては、木曾地域の尾張藩領においては、伐り拓いて数年経過した焼畑としての古い「切畑」を、「古畑」あるいは「原畑」の地目として見分してほしいとの28か村連名での嘆願書が奉行所へ出されている。在地においては、焼畑を含む「切畑」と、数年間放棄された後に再び畑として利用された「焼畑的なハタケ」ではない「古畑」と「原畑」が、互換性の極めて高い土地利用であり、地目名であったことが判明した。

この点は、山間の森林を伐り拓いて営まれて来た典型的な「焼畑」はもとより、従来その存在と認識が薄かった草原（草野）と灌木林（芝間）など切り拓いて営まれた「草原の焼畑」を理解する上からも、さらに、全国的な関連史料の調査と再検討が必要である。今後の研究の進展に期したい。

謝辞 資料調査の段階におきまして、県立長野図書館の資料情報課の皆様には、詳細な資料調査の上での、ご丁寧かつ貴重な情報をいただきました。明記して、心よりお礼を申し上げます。

長年にわたりますご厚誼に感謝し、本稿を京都大学の米家泰作先生に献呈させていただきます。

参考文献

- 1) 米家泰作 (2011) 「高島藩の『下山畑』と焼畑について」、2011年度実習旅行報告--諏訪市--、京都大学。
同 (2019) 『森と火の循環史』、思文閣出版、第三章四節の(2)の「信濃国検地」に成果の一部が組み込まれている。
- 2) 『長野県史』近世史料編・第三巻・南信地方、74号文書。
- 3) 伊藤寿和 (1996) 「平安・鎌倉時代の『山畑 (焼畑)』に関する歴史地理学的研究」、日本女子大学紀要・文学部・45号。
同 (2000) 「紀伊国の『山畑 (焼畑)』に関する歴史地理学的研究」、史境41号。
同 (2001) 「古代・中世の『山畠』に関する歴史地理学的研究」、史艸42号。
- 4) 伊藤寿和 (1996) 「古代・中世の『野畠』に関する歴史地理学的研究」、日本女子大学大学院・文学研究科紀要・1号。
- 5) 長谷川正次 (1985) 『高遠藩の基礎的研究』、国書刊行会。
- 6) 北原真人 (1957) 「元禄前後の畑作農業について」、伊那路1巻10号。『近世の信州伊那・高遠』、1977年に再収。
- 7) 前掲2) 335号文書。
- 8) 前掲2) 138号文書。
- 9) 前掲2) 149号文書。
- 10) 前掲2) 409号文書。
- 11) 前掲5) p.46。
- 12) 前掲5) p.149。
- 13) 『長野県史』近世史料編・第6巻・中信地方、82号文書。
- 14) 伊藤寿和 (2010) 「近世前期における焼畑耕作の実態について」、史艸61号。
同 (2010) 「近世における会津地方の『焼畑 (鹿野畑)』に関する基礎的研究」、日本女子大学紀要・文学部・59号。
同 (2012) 「近世における焼畑山村の家族の実態と焼畑農法の変容について」、日本女子大学紀要・文学部・61号。
同 (2013) 「近世における焼畑山村の人口移動とその実態」、日本女子大学紀要・文学部・62号。
同 (2014) 「近世における焼畑耕作の実態に関する再検討」、日本女子大学紀要・文学部・63号。
同 (2015) 「近世中・後期における『切畑 (焼畑)』耕作の実態に関する再検討」、史艸65号。